
色面構成 - 同一平面上の奥行きについて -

三上 秀夫

Composition with Color Planes -Coplanar Depth-

Hideo Mikami

KEY WORDS : Geometry, Abstraction, Color, Composition

作品概要

視覚表現分野における造形原理と思考方法からなる、単純な図形による幾何学構成の作品である。2023年6月20日～2023年7月2日まで仙台、Gallery TURNROUNDにおいて開催された展覧会「三上 秀夫 個展」の記録である。会場には、作品の他にステイトメント、作品リスト、展示マップを掲示した。作品概要として、そのステイトメントを以下に掲載する。

色面構成 同一平面上の奥行きについて

視覚世界は誰もが共有できる客観的世界のように思えるが、よく見ると実は慣れ親しんだ自分の演出がされた舞台を見ているようなものである。その演出は無意識裡になされているので本人はあまりそのことに気付いていない。視覚に限ったことではないが、ありのままにものを捉えることは非常に困難である。その慣れ親しんだものの影響から少しでも逃れることで、本当の視覚世界を推し量ることができるのではないだろうか。そう思って作品の要素、「色」「素材」のわずかな違いと、それに見合った抵抗感を頼りに、作品と対峙している。

前回の個展の準備段階から、「同一平面上」に図形を配置するということの困難さを思い知った。平面上の奥行と、どう向き合えばよいのか。

主題を“同一平面上の図形の配置”から“同一平面上の色面分割”に変更することで、その場を切り抜けようとした。それと同時に用いた苦肉の策が、イリュージョンの活用であった。そもそも絵画における「イリュージョン」とは、二次元的平面に描かれたものが三次元的奥行きを持ち、空間として存在しているかのように見なされる視覚効果をいう。その平面に現れた奥行きに対して、同じイリュージョンを逆向きに用いることで、奥行きを打ち消そうと考えた。その逆向きの操作で生じたものを「二次元的イリュージョン」とし、平面の非空間性を取り戻すための手段とした。色と形、素材は、空間を打ち消しあい、補完しながら、平面を維持するように働く。

以上のような制作方法で「同一平面上の図形の配置」を可能にしたいと思っている。また、その方法はいずれ、作品の素材や厚み、作品を取り囲む壁や空間にまで、「同一平面＝非空間性」として影響を及ぼすことができたらと考えている。



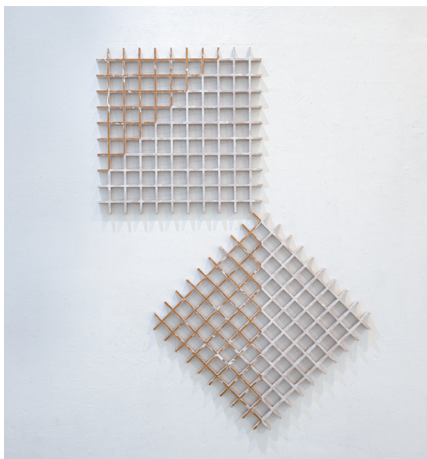
1.

三上 秀夫 個展 色面構成 - 同一平面上の奥行きについて - 2023年6月20日～7月2日 仙台アーティストランプレイス SARP(Sendai Artist-Run Place)

Work_050 (2021年)
キャンバスにアクリル絵具 (W20×H20×D2cm)
3点一組

Work_054 (2021年)
キャンバスにアクリル絵具 (W36.4×H51.5×D2cm)

Work_055 (2023年)
キャンバスにアクリル絵具 本材 (W130×H162×D3.5cm)
100号2点一組



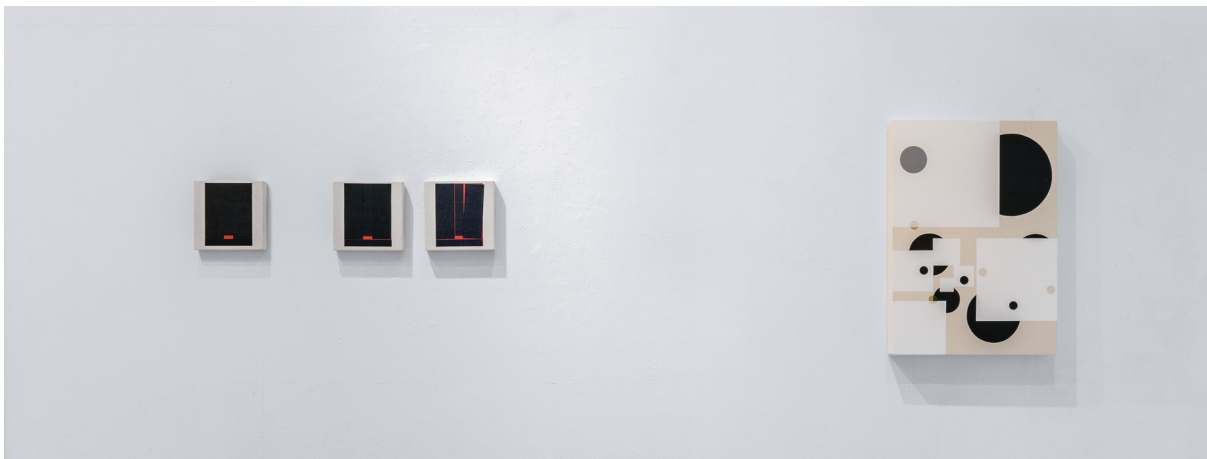
2.

Work_049 (2023年)
キャンバスにアクリル絵具 糸 (W42×H42×D2cm)
2点一組



3.

Work_052
キャンバスにアクリル絵具 (W60×H60×D120cm)
2点一組



4.

Work_050 (2021年)
キャンバスにアクリル絵具 (W20×H20×D2cm)
3点一組

5.

Work_054 (2021年)
キャンバスにアクリル絵具 (W36.4×H51.5×D2cm)



6.

Work_056 (2023年)
キャンバスにアクリル絵具 (W15×H15×D2cm)
2点一組

7.

Work_057 (2023年)
キャンバスにアクリル絵具 (W15.8×H22.7×D2cm)
4点一組